

式 辞

昨年度に増して温かな冬が終わり、3月の平均気温は多くの個所で観測史上最高の記録を更新しています。暖かかった昨年でさえ、本校の中庭では紅梅がこの時期咲き誇っていたのに、今年はすでに散り、桜の花が3月末にほころびはじめ、4月7日の今は満開になっています。

さて、新型コロナウイルスの感染拡大が警戒されてはや1年が過ぎました。依然として予断を許さないところですが、令和3年度長野県蓼科高等学校の入学式がここに挙行できましたことは、この上ない喜びであります。

今回も大変残念であります、この場にご来場叶いませんでした、両角立科町町長様、滝澤PTA会長様、芝間同窓会長様をはじめとするご来賓の皆さまからも、栄えある入学式にお祝いの言葉を頂戴しましたことをここにご披露し、深く感謝申し上げます。

そして、晴れて入学を許可された69人の新入生のみなさん、入学おめでとうございます。「蓼高」の愛称で親しまれる本校へようこそ。教職員一同ここから歓迎をいたします。蓼科高校は西暦1900年、蓼科地域の人々の熱意の結晶として組合立蓼科実業補習学校として開校して以来、この地域の教育の拠点校として、地域とともに発展と変遷を遂げた、創立121年を迎える歴史ある伝統校であります。私のいるステージの真上をご覧ください。大きな額がありますが、「蓼科学校」という文字が書いてあります。これは初代校長であり、さらに農業学校への発展を考えた保科百助先生が、当時長野県出身の大物政治家であった渡邊国武に書いてもらったものであります。現在は普通科の高校となっていますが、保科百助先生の教育理念通り、地域に根差し実学を重んじる校風は変わりません。それは今、いくつもの地域連携授業に形を変えて、脈々と受け継がれています。

さて、新入生の入学に当たり、一言申し上げて、お祝いの言葉に代えたいと思います。みなさんは、本校入学を自ら志し、選抜試験を経て今日から蓼科高等学校の一員となりました。本日の喜びは、みなさんのこれまでの努力の結晶であることは、いうまでもありません。

しかし、その陰には、みなさんを慈しみ育ててこられたご両親、ご家族、小学校や中学校で教えを受けた先生方の心のこもったお導きのあったことも忘れてはなりません。また、地域の中で、或いは離れたところから、みなさんは気づかなかったかもしれないけれど見守る人たちがいたということにも思いを致してください。みなさんを桜の花にたとえるならば、花を咲かせる樹木全体に当たるのがこれらの人々であったわけです。そのことを念頭に置いて、そしてただいまの初心を忘れることなく、みなさんが将来、社会の中で確かな場所を占めることができるよう、一人ひとりの目標に向かって研鑽を積む三年間を本校で過ごされることを心から願っています。

そして最後になりましたが、本日ご臨席いただきました保護者の皆様、お子様のご入学、誠におめでとうございます。

時代の変化、社会の変化に伴い、今、学校教育は大きく変わろうとしています。しかし、一人ひとりの生徒の自己実現を図り、次世代を担う人間を育てるという教育本来の役割に

はいささかの変化もありません。そして、それは子どもたちの先輩として生きる全ての大人の責任であり、そのためには学校と家庭が協力し、同じ思いで子どもたちと接し、支えていくことが必要だと考えます。学校との連携を密にしながら、ご家庭でも子どもたちと話し合う機会を大切に、その成長を温かく見守っていただきたいと思います。蓼科高校での生活を意義あるものにするのは、まず生徒自身の努力ですが、それを支え、本日入学した生徒諸君が、明るい未来を掴むため、私ども教職員一同全力を尽くす所存でありますので、どうか皆様方のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

朝顔が芽をだし、花を咲かせる過程には、暖かな光ばかりでなく、寒い季節と夜の暗さがなければ、良い花は咲かないのだということを聞いたことがございます。ここにいるすべてのみなさん、本日、晴れの舞台に立った可能性に満ち溢れた生徒諸君が、これから迎える3年間、幾多の困難を乗り越え、喜びを分かち合いながら、蓼科山に抱かれたこの大地で、花を咲かせ立派な実を着ける人間に成長するために、互いの持つ力を一つにし、支えてくださいますことを切にお願いし、入学式の式辞といたします。

令和三年 四月七日 蓼科高等学校長 宮澤和人